

高校教育が大学・専門学校とつながる意味

探究型学習で知られる京都市立堀川高校の元校長であり、中央教育審議会 高大接続特別部会等では高校教育現場の生の声を精力的に発信している荒瀬克己先生。同じ学びの場である高校と大学の接続と連携について語っていただきました。

取材・文/堀水潤一 撮影/中岡邦夫

大谷大学教授・中央教育審議会高大接続特別部会臨時委員・元京都市立堀川高校校長

荒瀬 克己



Katsumi Arase

1953年生まれ。京都教育大学教育学部卒業。京都市立高校教諭、京都市教育委員会指導主事を経て、98年京都市立堀川高校教頭、2003年同校校長。12年京都市教育委員会教育企画監。14年より大谷大学文学部教授。05年以降、中央教育審議会 初等中等教育分科会、教育課程部会、キャリア教育・職業教育特別部会、高等学校教育部会、高大接続特別部会、教職大学院特別審査会等の各委員、京都市立高等学校長会長等を歴任。国立高等専門学校機構監事ほか役職多数。

高校も大学も、同じひとりの人間が学ぶ場所

京都市立堀川高校が1999年に人間探究科・自然探究科という新たな専門学科を設置した際、私たちは「高校の役割は大学に受からせることだけではない」と考え、自ら学ぶ姿勢をもち、将来どう生きていくかまでしっかり考えられる「自立する18歳」を育てることを目標としました。「探求」とせず「探究」としたのは理由があります。前者が、答えのあるものを探すことだとすれば、後者は

社会で生きていく力を 連続してつけていく

答えが複数あったり、なかったり、あるいはすぐには見つからないものを探すことだと捉えたからです。実際、多くの生徒は、入試に直結しないテーマに没頭し、同時に難関大学にも合格していきましました。

この取り組みは、大学の学びの先取りであり、高大接続教育の好例として評価されることもあります。ただ、私たちは大学での学びだけではなく、生涯にわたって必要な力の育成を常に意識してきました。

こうした気持ちは今も変わりません。私が臨時委員を務めている中央教育審議会の高大接続特別部会は、

2012年の諮問以来、大学入学者選抜の改善を主要な議題として活発な議論を続けてきました。そこで前提となっているのは、「大学入学者選抜の改善は、高校教育の質保証と大学教育の質的転換を一体として考えなければならぬ」というスタンスです。これは教育の連続性という点からも大変重要なことで、初回の会議でも次のように挨拶しました。

「高校も大学も学ぶ場であり、学び続けていく青年をどのように育てていくのかということに視点を当てた議論をしたいと思えます。卒業したら生徒と高校との関係は切れるかもしれませんが、大学と学生との関係も切れるかもしれません。しかし、彼らはその後もずっとこの社会で生きていくわけであり、その際に必要な力を高校教育、大学教育で連続してつけていかなければなりません」

ただ、現実問題として教員は、高校

自分の力でやっていける人間を送り出しているか



伏見工業高校の土木科の生徒たちに文語文法を教えていた頃、「面白いけど、なんぼになる?」と聞かれて困りました。堀川高校の「探究基礎」はおよそ受験に直結してはいません。でも、生徒も教員も面白がっています。いちばん大切なのは、面白いと思えること。それが学習意欲を引き出し、モチベーションを生むのでしょう。

なら高校、大学なら大学と、それぞれの段階においてのみ生徒・学生とかかわっているわけで、入学以前どころか卒業後も知らないことがほとんどだと思えます。にもかかわらず、「教育の成果は20年、30年経たないとわからない」と口にする教育者は少なくありません。しかし、20年後に成果がでるのなら、数年後に何らかの成果の兆しが表れて然るべきです。例えば投

票率などはわかりやすい指標と言えませんか? 学校教育法には「国家及び社会の形成者として必要な資質を養う」「社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い」などの文言があります。突き詰めれば選挙権を正しく行使する力と言えなくもありません。高校卒業後2年もすればその力の有無が明らかになるわけであり、教育現場と社会は連続してい

るのだということを私たちはもっと意識するべきです。

育成するべきは次のステージで必要な力

京都市教育委員会に在職していたとき、「中高接続プロジェクト」という取り組みを立ち上げました。中高では文化が違いますから、白熱した議論というか、不満がぶつかり合うので

すが、大切な過程だったと思います。連携は互いを知ることからがスタートです。会議では、高校側からこんな注文がでていました。

「中学段階までに身につけておくべき基礎的な知識や技能、いわゆる狭義の学力とは、要するに高校1年次の早い段階の授業についていける力のことであり、中学校では最低限その力をつけておいてほしい」

高校は「丸投げ」からの脱皮を

その通りだと思いません。これを高大接続に置き換えるなら、少なくとも大学の授業の初期段階に何とかついていけるだけの力を高校でつけておかなければなりません。多くの大学は現在、リメディアルや初年次教育に骨を折っているわけで、高校側はこのことに責任を感じる必要があります。教育の接続という意識をもたずに大学に文句ばかり言っているのも何と始まりません。

確かに入試に振り回されている現実はあるでしょう。私も「数学を試験科目として課さない経済学部はケンカラン」と思っていました。でも考えてみたら、経済学部志望なのに数学の勉強をしていない生徒のほうがおかしいですよ。ね。「数学の勉強をしないと大学入学後、たちどころに困るし、将来の仕事にも差し支えるよ」と伝えるのが本当の進路指導です。責任放棄はいけません。大学側も同様に、社会に送り出す以上、どんな環境におい

ても自分の力でやっていけるだけの力をつける必要があります。そもそも、教育の役割とは、社会で挫折しないよう、若いうちにその子に應じた必要な力をつけることであるはずですよ。

堀川高校に、国際宇宙ステーションの実験棟きぼうの製作に携わっていた教員がいます。彼が言うには、どんなシステムにも複数の系統が用意されており、一つが故障しても別系統が働き、その間に修理を行うとのこと。ただし、宇宙飛行士とはいえ万能ではありませんから、専門家のように直すことはできません。でも、しなければならぬ。そのため緊急時に修理できる方法を突き詰めて設計しているのだということです。

これは教育に似ていると思いませんか。卒業生は、社会で他人とかわりながらひとりで生きていかねばならない。困難に直面したとき、「では助けに行きましょう」というわけにはいきません。そのため、なんとかひとりでやっていけるだけの力を、安全地帯にいるうちに身につけさせる。繰り返しますが、それが教育です。

互いが独立して初めて連携は成立する

高大連携といえ、大学の先生の

出前授業や講演、研究室訪問などが中心ではないでしょうか。本物に触れることで生徒は多くの刺激を受けます。それは重要。しかし、高校生のレベルに合わせようと必要以上に「わかりやすさ」を演出する傾向があるとしたらブレイキをかけてほしいと思います。

ご存じの通り、若者は子どもだましを見抜きますし、ある程度の負荷があつてこそ人は育ちます。大切なのは、わかりやすいかどうかではなく、意味があるかどうか。役に立つかどうかではなく、面白いかどうか。「よくわからないけれど、すごいことだよ。大変そうだけれど、勉強してみようかな」という気持ちを抱かせることが大切です。

高大連携は、普段の授業を客観的に把握、認識するいい機会でもありません。大学の研究や授業を見て、「興味深かった」で終わらせず、ぜひご自身の授業に生かしてください。

ある学校の先生が出前授業の失敗談を話してくださいました。「このテーマはA大学のB先生、この分野はC大学のD先生」とあちこちから著名

大学・専門学校はパートナー

な先生を呼ぶことにのみ尽力していたところ、「もっと面白い先生を呼んできてください」と生徒からは好評だったという、日常の授業に対する目がシビアになり、かえって勉強をしなくなったとのこと。

もつとも避けるべきは丸投げです。高大連携は、単独では得難い教育的な効果を期待して行うわけですが、一方の当事者の関心が薄ければ効果は半減します。単なる行事の消化に終わってはもったいないですよ。教育に関しては高校の教員のほうがプロなのですから、人任せにせず、自分たちの教育活動のなかでどう位置づけるかを積極的に考えましょう。

大学も専門学校も、人を育てる意味では大切なパートナー。ただし、気をつけないといけないのは、連携というのは互いに独立した者同士が結びつくことであつて、不完全な者同士の結びつきは連携とは言わないということです。大学との接続や連携を考えると、まずは高校は高校としての責任と教育の成熟を目指すべきだと思います。まさしくプロなのですから。